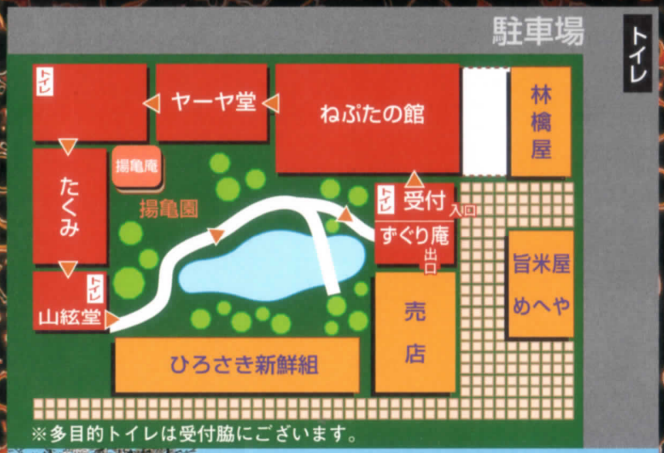
JAつがる弘前農産物直売所
「ひろさき新鮮組」
■新鮮な朝採り野菜の産地直売施設です。

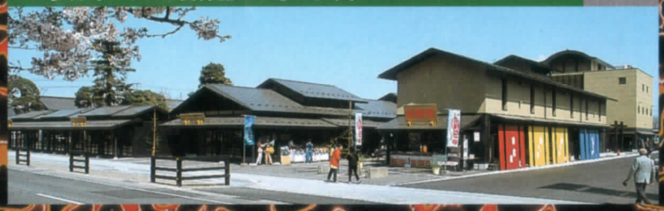
売　店（青森県特産品センター）
■青森県内のみやげ品をはじめ様々な農林水産加工品を取りそろえて販売しています。

JA津軽みらい石川支店りんご直売所
「林檎屋」
■農協が販売している新鮮な青森りんごの直売所です。

ふるさとの味「めへや」
■手焼せんべいの実演販売をしています。

大かまど飯 津軽旨米屋（うまいや）
■精米したてのお米を石竈（かまど）で炊くほっかほっかのご飯とお惣菜の食事処です。





観光施設
津輕藩 ねぷた村
〒036-8332 青森県弘前市亀甲町61
Tel.0172-39-1511（代） Fax.0172-39-1212
http://www.neputamura.com

弘前ねぷたの館

■国の重要無形民俗文化財に指定されている弘前ねぷた祭り（8/1～8/7）の由来は、「坂上田村麻呂が蝦夷征伐の際に始めた」というおとぎ話や、「夏の睡魔を追い払うねむり流し（精霊流し）が始まり」という説や、「津軽藩祖為信が京都で豊臣秀吉に大灯籠を見せたのが始まり」などと、さまざまな説があります。

ねぷたの形は扇型が主流となっており、正面の絵は鏡絵といい三国志・水滸伝などの勇壮な絵が描かれ、後面は見送り絵といい対照的な愁いを含んだ美人画が描かれています。

前灯籠を先頭にして、ねぷたの引き綱に連なった子供たちを中心に老若男女が、笛や太鼓、鉦の哀調を帯びた囃子に合わせて「ヤーヤドー」と掛け声をはりあげて城下町弘前を練り歩きます。

ねぷたの間「ヤーヤ堂」

■弘前ねぷたの資料の展示コーナーと県内各地の「ねぶた」「ねぷた」の紹介コーナーです。

■晴れた日に岩木山を望めるスペースには、「岩木山」と重要無形民俗文化財「お山参詣」の紹介コーナーもあります。

金魚ねぷた

■津軽錦とよばれる金魚がこの「金魚ねぷた」のモデルとなっています。江戸時代の明和年間（1764～1771年）、津軽藩士が京都から持参し藩主に献上しました。金魚は元来、幸福を呼ぶ魚と云われ、当時の庶民はそれをねぷたにして広め、現在でも弘前ねぷた祭りの際には、子供達が提灯のように手に持ち街を練り歩きます。

蔵工房「たくみ」

■藩政時代から残る米蔵を利用した製作工房です。「津軽塗」「こぎん刺」「こけし・こま」「津軽焼」「津軽錦絵（ねぷた絵・凧）」の製作風景を見学体験出来ます。

【津軽塗】

津軽塗は津軽地方の代表的伝統産業であり、江戸時代中期の藩主特権階級のためにつくられた高級漆器で四代藩主信政が文化の振興発展のために、塗師によりつくりだされ藩の支えの中で育てられたといわれております。明治以降は産業化され、昭和50年には国の伝統工芸品の産業の産地指定を受けています。

刻々と時が過ぎても、脈々と受け継がれる伝統工芸
触れれば分かる、その懐の深さを

【津軽こぎん刺し】

こぎん刺しは藩政時代、津軽地方の農民の仕事着であり普段着です。いつ頃から作りだされたものか明らかではありませんが、少なくとも200年以上さかのぼると云われています。雪に閉ざされた長い冬の生活に、津軽の農民が限られた資材（苧麻・綿糸）を使い保温と補強の目的で作り出された農民の知恵の結晶でもあります。

【弘前こけし】

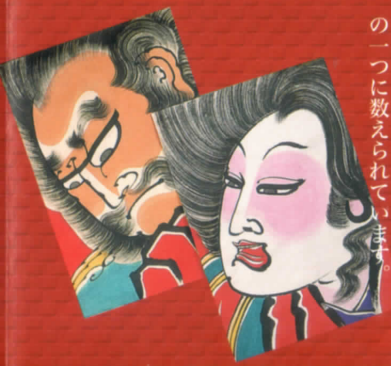
江戸時代末期頃から作られており東北地方独自の子供用玩具として親しまれていましたが、明治中頃から大人の鑑賞用としても作られるようになりました。こけしは大きく分けて11の流れ（系統）があり、「弘前こけし」は津軽系に分類されます。描彩は素朴なものが多く中にはアイヌ式の紋様を描いたものもあります。

【津軽焼】

津軽の陶芸は四代藩主信政の命により元禄四年（1691年）江戸の陶師、金龍山万衛門の弟子、平清水三右衛門が藩の用度品を焼成したのが始まりとされています。その後、文化三年（1806年）頃から悪戸焼や大沢焼（後の下川原焼）が焼かれるようになりました。

残念ながら、大正時代までにほとんど廃窯となっており、存続しているのは下川原焼のみとなっています。現在の津軽焼は昭和になってから再興されたもので、りんご木灰を使用したナマコ模様の釉薬が特徴です。

【津軽凧】



津軽凧は困窮した下級武士の内職として作られていましたが、幕末から明治にかけて盛んになり、その絵は葛飾北斎の流れをくみ、主に勇壮な戦国武将「三国志」、「水滸伝」、等を題材としたものが多くみられます。凧の骨組みは「竹」ではなく青森特産の「ひば」の木を用いて作られているのが大きな特徴で長崎の連凧、白根の大凧と共に日本三大凧の一つに数えられています。

津軽三味線「山絃堂」

「津軽三味線の歴史」

■邦楽の三味線の歴史は古いが、津軽三味線の歴史は意外と新しい。

明治三十年代に梅田豊月が完全な津軽民謡の唄付け伴奏者として登場する。だが当時は三味線弾きの地位が極端に低く、民謡歌手の三分の一位だった。梅田豊月は後に上京して浪曲の曲師に転向した。その後に登場するのが津軽三味線の神様とも言われ、現在もその奏法が脈々と伝えられてる白川軍八郎である。白川軍八郎は雨垂れの音や地吹雪の音を三味線に乗せて、聴く人の腹の底の底に染み込んで来る、いわゆる「津軽の味」を出した本物の名人だった。現在盛んに演奏されている独奏を最初に弾いた人でもある。白川軍八郎の弾く音を楽屋で聴いて、猛稽古を重ね、たちまち白川軍八郎に迫る実力を付けたのが木田林松栄である。豪快な性格で、まず音で客をびっくりさせて圧倒し、津軽民謡を盛り上げた。また、最初に津軽三味線を海外に紹介した功労者でもある。この木田林松栄の弟弟子が福士政勝である。白川軍八郎、木田林松栄が三味線だけで客を呼べたのに対し、福士政勝はあくまでも伴奏者であった。だが、その実力は前二者に決して劣るものでなく、当時の人は白川軍八郎・木田林松栄・福士政勝を称して三羽烏と呼んだ。高橋竹山は梅田豊月の孫弟子で、長い門付け生活の末に盲学校に入学するのだが、民謡家の成田雲竹氏に見出されて表舞台に登場して来る、忘れてはならない名人である。

談・山田流総本家　故　山田千里氏

「揚亀園」茶室「揚亀庵」

■明治時代の後期に小幡亭樹によって作庭された大石武学流庭園です。全体に女性的な優美さをたたえた庭で借景の岩木山と弘前公園の老松が風景を広大かつ豊かにしています。

［弘前市保存緑地指定］

揚亀庵

■「弘前市有形文化財」に指定されている雪国では珍しい吊り天井式の茶室です。

独楽処（こまどころ）「ずぐり庵」

■古くから伝わる津軽独特の「ずぐり」をはじめ、様々な「変わりこま」の実演コーナー。

入村券

№ 753934

津輕藩

ねぷた村